**チャシ アン カラの会からの支援の呼びかけ**

チャシ アン カラの会

代表 島田あけみ

「チャシ アン カラの会」は、首都圏アイヌのための集いの場を作るために集まった首都圏アイヌの有志の会です。現在35人の会員がいます。首都圏アイヌにとって自分たちが集い、心置きなく語り合える場を持つことは長年の悲願です。多くの先輩たちが国や地方自治体にかけあって努力してきましたが、まだ実現していません。私たちは先輩たちの努力と願いを引き継ぎ、首都圏アイヌのための集いの場を作る運動を続けていきます。

東京には八重洲に(財)アイヌ文化振興・推進機構が運営するアイヌ文化交流センターがあります。アイヌ語、アイヌ文化の教室が開かれ、私たちの話し合いの場になっています。しかし、センターはあくまでも国の所有で、利用上の制限があり、私たちが自由に使うことができません。オフィスビルのなかにあるので、火を使うことができずに、カムイノミができませんし、アイヌ伝統料理を作ることもできません。

小さくてもいい。同胞が集って、夜を徹して心置きなく語り、泣き笑いできる場所が欲しい。私たちが作ったアイヌの作品を展示し、首都圏にアイヌが暮らしていることを多くの人に知ってもらいたい。私たちはそう思っています。

「チャシ アン カラの会」の運動の特徴は、集いの場を国や地方自治体に作ってもらうのではなく、自分たちで作ろうとしている点です。少しおおげさに言えばアイヌ自立の運動だと言えます。何かを実現したければ、まず自分たちでできることを自分たちでやることだということをニュージーランドの先住民族マオリの人たちから学びました。「チャシ アン カラ」とは「自分たちで作る砦、活動の場」という意味のアイヌ語です。「アン カラ」(「自分たちで作る」)という言葉に私たちの気持ちをこめました。

マオリの人たちのコミュニティにはマラエという伝統的な集会所があり、マオリのコミュニティが所有し、運営しています。コミュニティの大事な行事はすべてマラエで行われます。

私は2009年と2013年にアオテアロア(ニュージーランドを意味するマオリ語)を訪れ、たくさんのマラエを訪問しました。マラエは建物と前庭から構成されています。建物は先祖の体を表し、光の世界。一方、前庭は争いや悪い感情がひそむ闇の世界を表しているとのことです。闇の世界から光の世界に入るために訪問客はポーフィリという儀式を受けます。訪問客と受け入れ側はスピーチと歌を交換します。ポーフィリが終わると、訪問客は先祖のスピリットが満ちる建物に入り、共に食事をし、語り合い、ざこ寝して、受け入れ側と訪問側は一つの家族になります。

人間はいろいろな問題や感情を抱えて生きています。関係が密でない大きな社会では、問題があってもそれから離れて生きることができます。しかし、マオリにしろ、アイヌにしろ、同胞意識の強い小さな集団ですから、そこから離れて生きることができません。それに、長い抑圧の歴史を生きてきた私たちが抱える問題や感情は複雑です。個人的な感情のねじれやもつれから大きくまとまることができなければ、将来を見すえる力、自立する力を失ってしまいます。マラエでのポーフィリという儀式は、個人やグループの対立を越え、一つになるための儀式です。大きな愛(アロハ)を精神文化の基礎に置くマオリの人たちの価値観を象徴しています。

「チャシ アン カラの会」は、マオリの運動の仕方だけでなく、ポーフィリという一つになるための儀式を生み出したマオリの叡智からも学びたいと思います。世代を越えて集まり、個人的な負の感情を乗り越えて、しっかりと向かい合って、心を通い合わせ、先祖を思い、首都圏アイヌ、アイヌ民族全体の将来を語る場、「チャシ アン カラ」をそんな場にしたいと思います。

「チャシ アン カラの会」は私たちの活動を知ってもらうために、そして首都圏アイヌの存在とアイヌ文化を知ってもらうために、毎年秋にアイヌ感謝祭を開いています。日本に暮らすマオリの人たちも友情出演してくれています。マオリの人たちの熱い気持ちに感謝しています。日本の社会のなかで孤立感を持つこともありますが、海外の同胞から差し伸べられる連帯と支援の手に元気づけられます。

まず、アパートの一室を確保して、「チャシ アン カラ設立準備室」という看板を掲げたいと思います。これからその資金作りを始めます。私たちは精いっぱい努力するつもりですが、私たちの力は限られています。以下の要領で寄付を募っておりますので、私たちの運動にご賛同いただき、ご協力いただければ幸いです。なにとぞよろしくお願いします。

振込先: 郵便振替　　口座記号番号00200-1-136288

口座名義人 チャシアンカラの会 島田あけみ

連絡先: 島田あけみ ファックス　042-763-6602